

歴史教育におけるエスノセントリズムとの対峙

ー日本統治下の朝鮮の教材化をめぐってー

高橋 健 司

はじめに

- 1 教材化の意義ー「多民族国家」としての戦前の日本ー
 - 2 教材化の問題点ー「人物史学習」のパラドックスー
 - (1) 浅川巧と柳宗悦の略歴
 - (2) 浅川巧の「語られ方」をめぐって
 - (3) 柳宗悦の「語られ方」をめぐって
 - 3 教材化の視点ーエスノセントリズム批判としてー
 - (1) 浅川巧の日記をもとに
 - (2) 浅川巧の著作をもとに
 - (3) 柳宗悦の著作をもとに
 - 4 授業の展開ー「浅川巧・柳宗悦のみた朝鮮」ー
- おわりに

はじめに

急速なグローバル化の波が押し寄せて来る今日、「固有の文化」の保存が叫ばれるのは当然のことかもしれない。何を指して「固有の文化」とするか、という定義の問題はさて置き、その優秀性を説く言説を目にするようになった。それは特に昨今の歴史教育における、「国民の誇り」を「回復」しようとする扇動的な運動の中に顕著に見受けられる。

この運動をめぐっては、その修正主義的歴史観が繰り返し非難されてい

るにもかかわらず、未だ衰える気配を見せないのは、運動の根底に流れる排他的なエスノセントリズム（自民族中心主義）が、一般受けするような土壌が醸し出されていることの現れかもしれない。

これは若い世代にとっても無縁ではない。むしろ若い世代の中にこそ、同調しようとする危険性が大きいのではないだろうか。それは、彼らにとって「史実」かどうかということよりも、自らのアイデンティティを「預ける」にふさわしい「物語」を欲す指向が見受けられるからである。この「預ける」ことの危険性を取り上げて、かつて私はオウムやナチズムに没頭した若者を扱った授業を展開した⁽¹⁾が、今度は「物語」の方を問い直す授業を構築してみたいと思う。

そのためには硬直化した「お題目」を唱えるような授業では無意味である。ではどのようにすればエスノセントリズムに対して冷静な態度を養えるのであろうか、というのが本論の目指すところである。

1 教材化の意義－「多民族国家」としての戦前の日本－

「近年急速に進む国際化」という表現は、決まり文句となってしまっている観があるが、それは「島国」で暮らしてきた日本人が初めて体験する未曾有の現象であるとする「了解」が含まれている。

そんな「常識」を覆してみせたのが『単一民族神話の起源』⁽²⁾や『〈日本人〉の境界』⁽³⁾を著した小熊英二である。彼によると、戦前の日本は「単一民族国家」などではなく、台湾や朝鮮、そして南洋の島々に暮らす異なる民族から成る「多民族国家」であり、それが自覚されていたことを検証した。

これはアジア地域の植民地化というプロセスであったにしろ、当時急速に進行する「国際化」と、向き合わざるを得ない状況が生み出されていた

ことを意味する。

しかし植民地化をめぐる未だにその是非を問う論争が続けられている中で、当時の日本人が「新たに加わった」異なる民族や文化と、どのように向き合ったのか、あるいは向き合わなかったのかを知ろうとする試みは少ない。⁽⁴⁾

私は欧米の多文化社会のモデルから学ぶことと併せて、かつての日本人の「異文化体験」を顧みることからも、異文化との共存を模索する道があるのではないかと考える。このような立場から、戦前の日本統治下の朝鮮を舞台に、浅川巧、柳宗悦という2人の人物の「異文化体験」を中心に教材化を試みたが、実際に授業で取り上げてみて、パラドックスとも言うべき現象が生じたことについて次に述べたい。

2 教材化の問題点－「人物史学習」のパラドックス－

(1) 浅川巧と柳宗悦の略歴

これまで無名に近かった浅川巧は、高崎宗司らの研究により、近年急速に「朝鮮の土となった日本人」として、その名が知られつつある。⁽⁵⁾

浅川巧は1891年（明治24年）山梨県高根沢町に生まれ、秋田県で営林署に勤務した後、1914年（大正3年）朝鮮で教員となった兄の伯教を頼って朝鮮に渡り、朝鮮総督府山林課に勤務（後に総督府林業試験場に配属）の傍ら、兄の影響で朝鮮美術工芸品の収集・研究に従事するようになった。やがて白樺派で文芸活動を行っていた柳宗悦と知り合い、同化政策により破壊されつつあった朝鮮文化の保存運動を始めて、1924年（大正13年）遂に朝鮮民族美術館の開館に至った。1929年（昭和4年）には著書『朝鮮の膳』を出版するが、1931年（昭和6年）急性肺炎のため死亡。没後遺著となった『朝鮮陶磁名考』が出版された。生前の朝鮮の人々との別け隔ての

ない親交と朝鮮文化に対する深い造詣から、戦後も彼の墓は韓国林業試験場の職員の手によって守り続けられ、次のような文章（原文はハングル）の顕彰碑が建てられている。

韓国の山と民芸を愛し
韓国人の心の中に生きた日本人
ここ韓国の土になる

これに対し、浅川と親交を結んだ柳宗悦は、民衆によって作られ日常的に用いられる工芸品すなわち「民芸」に、新しい美を「発見」した「民芸の父」として知られている。

柳宗悦は1889年（明治22年）東京に生まれ、東京帝大入学後、武者小路実篤や志賀直哉らと共に文学雑誌『白樺』を創刊、以後『白樺』誌上に西洋美術の紹介についての文章を多数掲載していたが、大学卒業後、浅川兄弟との親交を通して朝鮮の工芸品の持つ美に開眼した。1919年（大正8年）朝鮮全土で三・一独立運動が広がり、日本が武力による弾圧を加えたことに対して、当時の知識人がほとんど口を閉ざす中、新聞紙上に「朝鮮人を想う」と題する朝鮮人弁護の文章を連載した。翌年「朝鮮の友に贈る書」を発表、以後浅川兄弟と共に朝鮮文化の保存と朝鮮民族美術館の設立のために奔走した。1922年（大正11年）王宮内に建設中の朝鮮総督府の工事のために、王宮正門の光化門が取り壊されることを知り、「失われんとする一朝鮮建築のために」を発表、反対運動を行った結果、光化門は移築保存されることになった。1924年（大正13年）朝鮮民族美術館が開館、翌年「民芸」の新語を造ると共に、今度は日本民芸美術館（現日本民芸館）の設立を目指して日本各地で民芸調査を行い、1936年（昭和11年）日本民

芸館が開館した。その後、沖縄での民芸調査と沖縄文化の保護運動を行うが、太平洋戦争の開始により中断、戦後は1961年（昭和36年）に亡くなるまで民芸研究に従事した。

（2）浅川巧の「語られ方」をめぐって

社会科の授業において浅川や柳が取り上げられる場合、それは「人道的な日本人」としての「人物史学習」である。ところが、私自身がかつて浅川の生き方に焦点を当てた授業を実践したところ、少数ながら日本の朝鮮支配を肯定的に受けとめる生徒が出現したことに戸惑いを覚えた。これは「善い日本人」が「免罪符」的に解釈されたと考えられる。⁽⁶⁾

これでは結果的に、最近出版された呉善花（オ・ソンファ）の『生活者の日本統治時代 なぜ「よき関係」のあったことを語らないのか』⁽⁷⁾ という本の中で、かつて朝鮮で暮らしていた「普通」の日本人に、「よき思い出」として庶民レベルで朝鮮の人々との間に「よき関係」があったことを語らせているのと同様、修正主義的歴史像に寄与しかねない。

実は浅川の死後間もない1934年に、彼の生前の朝鮮の人々との親交がクローズアップされて、既に「美談」として旧制中学の教科書に次のように取り上げられている。⁽⁸⁾

「人間の価値

安部能成

巧さんは、官位にも、学歴にも、権勢にも、富貴にもよることなく、その人間の力だけで堂々と生きぬいていった。…朝鮮のために大いなる損失であることはいうまでもないが、私は更に大きくこれを人類の損失だというに躊躇しない。人類にとって、人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の喪失くらい大きい損失はないからである。

巧さんは確かに一種の風格を具えた人であった。丈は高くなく、風采も

あがらない方で、卒然として接すると、いかにもぶっきらぼうで無愛想に見えた。しかし親しんでゆけばゆくほど、その天真の人のよさが感じられ、その無邪気な笑いと巧まぬユーモアとは、求めずして一座を暖かにする力があつた。

…骨董を愛玩する者は多い、しかし真に芸術を愛する者は少ない。けれども芸術を愛するよりも更にむずかしいのは、人間を愛することである。多くの芸術愛好者もしくは愛好者と称する人々は、神経質な、気まぐれな、人間愛好者もしくは嫌悪者であり、わがままなエゴイストである。しかるに…我が巧さんは、実にまた類い稀な、同情の豊かな人であつた。そうしてそれは朝鮮人に対して殊に強く現れたのであつた。

巧さんは人の為にしたことをめつたに人には語られなかつた。けれども、巧さんの助力によって学資を得、独立の生活を営み、相当の地位を得るに至つた朝鮮の人は、一人や二人ではなかつたそうである。巧さんの死を聞いて集まつて来たこれらの人々の、慈父の死に対するような心からの悲しみは、見る人を惻々と動かしたという。わたしもまたその一人を見た。彼は巧さんを本当のお父さんよりも懐かしく思つていたといつた。そういう彼の顔には掩われぬ誠が見えた。巧さんは恐らくその真つすぐな曇りなき直覚で、人の気づかぬ朝鮮人の美点を見出されたのであろう。巧さんの心は朝鮮人の心を掴んでいた。その芸術の心を掴んでいたように。

親族・知人が集まつて相談の結果、巧さんの遺骸に白い朝鮮服を着せ、重さ四十貫もあつたという二重の厚い棺に納め、清涼里に近い里門里の朝鮮人共同墓地に土葬したことは、この人に対してふさわしい最後の心やりであつた。里門里の村人の、平生巧さんに親しんでいた者が三十人も棺を担ぐことを申し出たが、里長はその中から十人を選んだという。この人達が朝鮮流に歌を歌いつつ棺を埋めたことは、誠に強いられざる内鮮融和の美

談である。

巧さんの生涯は、カントのいったように、人間の価値が実に人間にあり、それより多くも少なくもないことを実証した。私は心から人間浅川巧の前に頭を下げる。」

この文章を語るのは、生前の浅川をよく知る京城帝大教授の阿部能成である。もともとは浅川に対する追悼文であったが、縮小されて教科書に掲載された。他の人々の証言と照らし合わせて見ても、浅川の人となりがよく描かれた文章だと思うが、最後の部分で浅川巧の生涯を「内鮮融和の美談」として祭り上げてしまっている。

ここで問題にしたいのは、「美談」によって覆い隠されてしまうのは何か、ということである。そこで元同僚・金二万（キム・イーマン）韓国林業試験場顧問の語る浅川像と比較してみたい。⁽⁹⁾

「浅川氏は韓国語を非常にじょうずに話し、常に韓国語で話した。…韓国人同僚に対する態度に差別はなく、日本人同僚から『あなたは韓国人か』と悪口を言われ、迫害されたほど韓国人を愛した。それだけでなく、彼は朝鮮服を好んで着て、夕方にはパチ・チョゴリ（朝鮮の男性用衣服）に木履（朝鮮のはきもの）をはいて帰った。長いキセルを好み、中国の帽子をかぶり、縄で編んだ背負い袋を背負い、市場に行って、韓国の骨董品、陶磁器などを買って、日常的に集めた。そして、そのおかしな様子のために日本人警官から取り調べを受けたこともよくあったという。

浅川氏は、林業試験場内の官舎に住み、平素、韓国人に親切で、韓国人たちを愛したために、正月や節季のときは、たくさんの韓国人の同僚たちが家に遊びに行った。自分は飢えても困っている人を助け、何人かの韓国人の学生には奨学金を与えていた。」

後半部分の浅川像は阿部と重なるが、前半部分で描かれているのは、浅

川と日本人との関係である。これに関して浅川の姉である小宮山栄もまた、浅川と日本人の関係を象徴的に示すエピソードを含めて次のように語っている。⁽¹⁰⁾

「朝鮮服を着てね、まことに風采はあがらない顔でした。ですから、『ヨボ、ヨボ』と朝鮮人だと思われて。電車で腰をかけていると、『ヨボ、どけ』なんて席をたたされると、黙ってどいて席にかけさせました。

あるときは、青年が学校に行ってたけれど、父が亡くなったので学校をやめた、なんていう話を聞きますと、そりゃかわいそうだといって、月謝を出してやって、しまいまで学校に出してやりました。それから、部落の人が初物だといって、もろこしをもってき、大根をもってきて、一生懸命庭をはいてくれたり、お風呂をくんでくれたりしたんですよ。そういう人にはおこづかいをあげたんです。月給日になると、もらいにくるんですが、あるときは月給が遅れて、明日おいで、なんていってるときもありました。」

こうした証言から浮かび上がってくるのは、ただ朝鮮の文化や人間を愛しただけではなかった浅川像である。反論もせずに黙って席を立つ浅川には、日本人であることの「罪」が自覚されていたのではないかと考えられる。ここで言う「罪」とは、朝鮮の文化・人間に対する優越感や蔑視に基づく差別である。

生前の浅川は周囲の人間に「多くを語らない」人物であったが、それは自らの「善行」を語らないのと同時に、「苦しみ」や「憤り」もまた語らなかったことを意味している。とすれば、彼のそうした側面を併せて語らない限り、かつて阿部が犯したのと同様、植民地支配を肯定的に捉えさせる素材として利用される危険性がある。

そこで重視したいのが、近年になって発見された浅川の日記の存在である。後で詳しく触れるが、彼の心の葛藤を知る格好の資料であり、実際の

教材として核となるものであると考える。ただ、浅川自らが私的な日記ではなく、柳のように公にそうした感情を語らなかったことに対して、私は咎める気にはなれない。彼は、どこまでも日本人であったし、実際一官吏であった。しかし日本人と朝鮮人の狭間で苦悩した等身大の人間ではなかったか。この点において私は共感を覚えると同時に、安易に浅川をして「民族の壁を越えた人物」として祭り上げることには危惧を抱いている。理想化は現実の問題から目を逸らせてしまう恐れがあり、新たな「美談」にすべきではないと考える。

(3) 柳宗悦の「語られ方」をめぐって

一方柳宗悦については、浅川と対照的に雄弁の人であり、その言動は明快で英雄的にさえ映る。実際、柳を授業で取り上げてみて、「語り方」によっては安易なヒーロー像を生徒に描かせてしまうことに気付いた。

それゆえ私には、植民地支配を「本質的に理解し、韓国の人々の苦難を思いやり、そのたたかいと思想に共感」した柳像を語る君島和彦や⁽¹¹⁾、高校での授業実践をもとに「福沢諭吉の視点から柳宗悦の視点へ」と語る目良誠二郎のように⁽¹²⁾、柳自身の実際の言動を越えて語ることには抵抗がある。柳には白樺派としての理想家肌のヒューマニストというイメージが強いが、だからといって理想化して彼を語ることもまた、「語り手」の願望を映す「物語」に陥ってしまう恐れがあるのではないだろうか。

この問題に関して、柳の行った行動と論文をつぶさに検討した高崎宗司が、「柳は、朝鮮の芸術を愛することを通して、朝鮮と朝鮮人を愛したと言われている。しかし、彼が愛したのは、朝鮮の芸術と、その芸術を生み出した朝鮮人であり、独立を求めて闘う朝鮮人ではなかったのである。」⁽¹³⁾と結論したように、自ら「政治には少しだに信仰を持たない」⁽¹⁴⁾と述べる

柳にとって、文化の保護こそ何より優先されるものであり、その目的の為に必ずしも朝鮮総督府と対立関係にあったわけではない。朝鮮民族美術館の設立に際しては、朝鮮総督を含む支配層に協力を求め、その力を借りている。これは懐柔策とも言うべき朝鮮総督府の「文化政治」に取り込まれ、結果的に植民地支配の強化に利用された側面があることを物語っている。その後エスカレートしていく同化政策を押し止められなかったという点でも柳の限界は銘記しなければならないと思う。

柳を教材として取り上げる上で、彼をして朝鮮のためにどれだけのことを成し遂げたのかを語ることは、むしろ韓国の人々の評価に委ねるべきであろうし、それを中心に据えた授業を展開しても発展性が期待できない。しかし、浅川以上に感情を顕にして訴えかけた、柳の同時代の日本人の優越感や妄想に対する憤りは、未だ克服できていないエスノセントリズムの問題を鋭く指摘しているのではないだろうか。この点に関して私は彼の言説に謙虚に耳を傾ける必要と意義を感じている。

3 教材化の視点—エスノセントリズム批判として—

(1) 浅川巧の日記をもとに

浅川巧の日記とは、浅川の死後ソウル在住の韓国人の手に渡り、その後1996年に故郷の山梨県高根町に寄贈されて公開・出版されたものである。現存するのは1922年（大正11年）の1年分と、1923年（大正12年）の7月9月分、そして同年の9月から10月にかけて書かれた「朝鮮少女」など日記風の随筆数点である。

この日記は浅川の朝鮮観を知る格好の資料であると共に、同時代の日本人に対し、彼がどのような眼差しを向けていたのかがわかる貴重な資料でもある。そこで実際に日記の記述をもとに、彼の日本観を見たい。⁽¹⁵⁾

まず大正11年6月4日分を引用してみる。

「大正11年6月4日 南山に登った。南山の薬水は美味だった。山頂にはケヤキやエンジュの大樹があって台地になっていた。氷屋も店を出していた。冷やしビールの一本を分けて飲んだ。少し下ると朝鮮神社の工事をしていた。美しい城壁は壊され、壮麗な門は取り除かれて、似つきもしない崇敬を強制する様な神社など巨額の金を費やして建てたりする役人らの腹がわからない。山上から眺めると景福宮内の新築庁舎（朝鮮総督府）など実に馬鹿らしくて腹が立つ。白岳や勤政殿や慶会楼や光化門の間に無理強情⁽¹⁶⁾に割り込んで座り込んでいるところはいかにもずうずうしい。しかもそれらの建物の調和を破っていかにも意地悪く見える。白岳の山のある間永久に日本人の恥をさらしている様にも見える。朝鮮神社も永久に日鮮両民族の融和をはかる根本の力を有していないばかりか、これから又問題の的にもなることであろう。」

ここで浅川はソウル郊外の南山の山肌を削って建設中であった朝鮮神社（完成後、朝鮮神宮と改称される）の工事を目のあたりにし、「似つきもしない崇敬を強制する様な神社」と非難し、さらに北に視線を巡らして目に映った王宮内での朝鮮総督府の新築工事を、「日本人の恥」とまで言って憤っている。浅川の怒りは朝鮮の王宮を破壊してまで、支配者としての威厳を見せ付けようとする日本人の態度を、「無理強情」「ずうずうしい」と捉え、「日鮮両民族の融和」が詭弁であることを看過している。

次に大正12年9月10日分を引用してみる。

「大正12年9月10日夜 便りによると『東京の大地震の惨害は実際の災害の十分の一に過ぎない。他は地震のためでなくて不逞鮮人の放火による火災のためであると伝えられ、東京及びその近郊の日本人が激昂して朝鮮人を見たら皆殺しにするという勢いで善良な朝鮮人までが大分殺されつつあ

る由』とある。

…一体日本人は朝鮮人を人間扱いしない悪い癖がある。朝鮮人に対する理解が乏しすぎる。朝鮮人といえば誰も彼も皆同じと考えている。白い着物さえつけていたら皆同じ朝鮮人と心得ている。朝鮮人の有識者連中でも朝鮮服をつけて日本人の街を歩いたら恐ろしい侮辱をこうむることがあるという。…自分の母でも朝鮮人に対する考えにはよくない点が多い。そして日本人同士だったら色に出さない程のことでもすぐ露わしてしまう。母などは自分達の考えも随分判っている筈なのに、それだから他の人達には特に甚だしいのがある筈だとも思う。京城の本町通りの商人ときたらたまらない。僕でさえ朝鮮服の時は時々侮辱をうけていやな思いをするのだもの。

このことは些細のこの様だが、おろそかにされないことだ。日頃の憎悪が有事の場合忘れられる人間は少ない。人類とか神とかいう問題のわかる人なら始めから憎悪なんか感じないですむ。平常は人間を対象にしている憎悪を感じている者でも、時に神とか人類とか大きい問題の前に頭を転じて思いを新たにす得る様ならいいと思う。

…自分はどうしても信ずることができない。東京にいる朝鮮人の大多数が窮している日本人とその家とが焼けることを望んだとは。

…そんなに朝鮮人が悪い者だと思い込んだ日本人も随分根性がよくない。よくよく呪われた人間だ。自分は彼らの前に朝鮮人の弁護をするために行きたい気が切にする。今度の帝都の惨害の大部分を朝鮮人の放火によると歴史に残すとは忍び難い苦しいことだ。…日本は大東京を誇り軍備を鼻にかけ万世一系を自慢することは少し謹しむべきだと思う。」

ここでは京城（現ソウル）にあって浅川が、関東大震災に便乗して東京とその近郊に住む朝鮮人が放火し日本人が報復しつつある、という情報を伝え知り、それに対して「自分は彼らの前に朝鮮人の弁護をするために行

きたい」と述べると同時に、その原因について身の回りの「朝鮮人を人間扱いしない」日本人の態度を挙げている。それは彼自身の母親も含め侮蔑的な日本人の態度によって、浅川もまた深く傷つけられていることから、そうした日本人が朝鮮人に抱いている「日頃の憎悪」にこそ問題があると指摘している。そして、その根底にある日本人の驕りについても苦言を呈している。

この日本人の驕りについて、さらに詳細に記述しているのが、「副業品共進会」（朝鮮総督府が朝鮮の産業振興のために開いた工芸品の展覧会）と「朝鮮少女」と題する日記風の文章であり、順に引用してみる。

「大正12年10月6日夜 今度の共進会で一般朝鮮人から出品した工芸品はまだなかなかいいものがある。それらがこの会によって段々影がうすくなるのかと思うと心細い。工芸品でも日本人がいわゆる指導奨励したものにはろくなものはほとんどない。木工品、焼き物、い草細工などにはたまらなくいいものがまだ残っている。参考館を見ると日本内地から借りて来た物や各官庁の出品であるが、いずれも馬鹿らしいものばかりだ。参考館はもとよりの模範的出品のつもりであろう。産業を指導せんとする役人らの理想であるに相違あるまい。朝鮮の作品がこの参考品の様になることは朝鮮の破壊である。…朝鮮在来の手法をやめて直ちに日本式の手法を採用することは改良ではなく破壊である。」

「共進会に二十日余り通っている間に看守の朝鮮少女と仲よしになった。僕の姿を見ると集まってくる少女らが七、八人あった。彼女らは大抵十五、六才で二十になった者はなかった。…彼女らは二、三人ずつ集まってよく日本人の女看守や守衛に対する不平を話し合っていた。また実際日本人の態度は僕らから見ても腹の立つ様なことが多かった。日本人の女看守は年増の者が多かった。そのためか看守仲間でありながら朝鮮少女を時々叱った。

また時に悪く言って守衛に告げ口したりした。そんな時少女の弁明は多くは無益に終わった。少女らは口惜しがって同士が集まるとささやき合った。『ヨボは役に立たない』という定評が通る程になった。少女同士の話は大体僕にはわかった。仲よしになってからは、かえって向こうから話かけて来た。不用意な日本人の態度に対し憎悪を感じないではいられないことが多かった。

…ある時などこんなことがあった。一人の日本人女看守が事務員のところに来て、『私にあんなところを見るのはいやです。並べてあるのは皆ヨボのものばかりです。もっと美しい物の陳列してあるところにやって下さい。ヨボが来ては売るかとか何ほどだとか話しかけるのですものいやになってしまいます。』こんな不心得の女が副業共進会の看守人だからたまらない。こんな例は珍しくない。一体看守とか守衛とか巡査とか消防とか、要するに番人であるがその番人が多すぎる。館内に入って見て感じの悪いတာらない。…女看守などというものは一体観覧者のために便宜をはかり、売約とか簡単な説明とかも心得ているべきは当然であるのに、質問されるからうるさいのそれが朝鮮人だからいやだのなんて言うのはもっての外のことである。こんな奴共だから朝鮮少女をいじめるのも不思議はない。

…僕が目から見たら日本人の威張る理由が不遜⁽¹⁷⁾でならん。」

この中で、日本人が「指導」し「改良」していると思いついでいるものは、浅川の目には「朝鮮の破壊」としか映らないにもかかわらず、他の日本人には「ヨボのもの」など取るに足らないと蔑む態度のために、それが見えないことに対する憤りと、朝鮮の工芸品だけではなく人間にまで侮蔑を加える日本人の姿に対する怒りが吐露されている。

このように浅川の日記には、日本人の驕り高ぶる態度を批判的に捉えている箇所が少なくない。謙虚な彼の人柄を考えれば一層その言葉の重みが

感じられ、自らもまた同じ日本人であることの「罪」の意識に苛まれたであろう彼の姿が想像できる。

(2) 浅川巧の著作をもとに

植民地支配という根本的に誤った時代状況の中に身を置かざるを得なかった浅川にとって、それでもなお願って止まなかったのは、朝鮮の民族と文化に対する正当な理解である。その集大成が彼の著作である『朝鮮の膳』と『朝鮮陶磁名考』である。⁽¹⁸⁾

『朝鮮の膳』の書き出しは次のような文章で始まる。

「これに記すところは系統的の研究とか、論拠の整然とした考証とかいう種類のものでなく、朝鮮の人達との長い間の交際が生んだ極めて通俗的の叙述にすぎない。しかしそれでも朝鮮の若い人達の中に既に忘れられた事項も少なくないようである。本書に載せた写真を示せば、かくも立派な器物が自国にあったかと驚く青年すらまれでない。これらのことは、ここしばらく過ぎたら更に不明になると思う。本書は見たり聞いたりした事実をできるだけ忠実に記載したつもりである。聞き誤りや説明に不備の点もありはせぬかと気にしつつも、書かぬと更に不明になる心配の方を強く感じて書いた。

その日常生活に私を近づけ、見聞の機会を与え、私の問いに親切に答えてくれた朝鮮の友、数えきれないほど多数の方々を一括してここに謝意を表し、なお親しみの一層加えられることを願ってやまぬ。」

さらに「膳」を取り上げたことについて、浅川は次のように述べる。

「正しき工芸品は親切な使用者の手によって次第にその特質の美を発揮するもので、使用者はある意味での仕上工とも言い得る。工芸品真偽の鑑別は使われてよくなるか悪くなるかの点で判然すると思う。一家の食物をのせ、

団らんの中心ともなる膳の面が月日と共に醜く禿げていったり、その脚がゆるんで何時も不安な感じを与えたりしたとしたら、その家庭に及ぼす直接間接の損害は決して少なくないと思う。

しかるに朝鮮の膳は淳美端正の姿をもちながら、よく我らの日常生活に親しく仕え、年と共に雅味を増すのだから正しき工芸の代表とも称すべきものである。

これはよく見る光景であるが京城から元山に行く汽車の中で、間島方面へ移住する貧しく疲れ切った農夫の一家が、その馴れない長い旅の道中に、邪魔とも思わず客車内に持ち込んでいる荷物のうちには、美しく拭きならされた膳を見うける。住み馴れた家も売り、農事における唯一の力と頼む牛も人手に渡し、親戚知人とも別れて知らない遠い国へ旅立つその家庭にも、使い馴らされた膳は見捨てられないものと見える。また京城でも家移りに運ばれる荷物が通るのを見ていると、満載された諸道具の上に古く美しい膳の添えられていないことはほとんどない。

…疲れた朝鮮よ、他人の真似をするより、持っている大事なものを失わなかったら、やがて自信のつく日が来るであろう。このことはまた工芸の道ばかりではない。」

最後の一文に見られるように、浅川はこの書を通して、朝鮮の文化を「遅れた」と決め付け「近代化」を標榜して「改良」しようとする日本の政策に対して、翻弄される事無く自らの文化のありのままの姿に自信を持って訴えかけている。

さらに浅川は、遺著となった『朝鮮陶磁名考』の中で次のように述べている。

「作品に近づいて民族の生活を知り、時代の気分を読むというような目的にあっては、まず第一に器物本来の正しき名称を知り、それを伝えたいので

ある。

…日本の茶人達が狂喜したほど美しい茶碗も、朝鮮人普段使いの飯椀の中から選択され、名工さえもその前に自らの力の不足を嘆息したほどの優れた茶入れも、源を質せば当時ありふれた薬味入れから抜擢されたものであるというような点を、できるだけ判然させておきたいと思う。かく詮索したからというて、名器の価値は増すとも減ずるような心配はないはずである。それらは生れながらの名前で呼び掛けるならば、喜んで在りし日の昔を語り、一層親しみを感じ得ると思う。またひいてはその主人であった朝鮮民族の生活や気分にも自ら親しみある理解を持てることは必然である。」

この中で浅川は、朝鮮の文化を正しく理解するためには、「生れながらの名前で呼び掛ける」ことが重要であると主張しているように、彼の生き方もまた、朝鮮の言葉が抹消されようとする時代に逆行して、その言葉を学んで親しく用い、多くの朝鮮の人々から慕われたものであった。彼は異文化に敬愛をもって接することの大切さを身をもって示したと言える。今でこそ、それは「当たり前」の態度かもしれないが、偏見と優越感に覆われた時代背景を考慮すれば、それがいかに困難なことであったかは想像に難くない。

(3) 柳宗悦の著作をもとに

先に述べた通り、柳は浅川のように私的な日記ではなく、当時の新聞や雑誌に掲載するという形で、批判的なメッセージを積極的に伝えようとしている。そこでまず最初に1919年の三・一独立運動の際に彼が朝鮮人を弁護した「朝鮮人を想う」⁽¹⁹⁾から見たい。これは読売新聞紙上に同年の5月20日から5日間にわたって掲載され、後に英訳されて日本の英字新聞に、さらに朝鮮訳されて朝鮮の新聞に掲載された。

「私は今度の出来事について少なからず心を引かされている。特に日本の識者がいかなる態度で、いかなる考えを述べるかを注意深く見守っていた。しかしその結果朝鮮について経験あり知識ある人々の思想がほとんど何らの賢さもなく深みもなく、また温かみもないのを知って、私は朝鮮人のためにしばしば涙ぐんだ。…日本は多額の金と軍隊と政治家とをその国に送ったであろうが、いつ心の愛を贈った場合があるか。

…我々日本人が今朝鮮人の立場にいると仮定してみたい。恐らく義憤好きな我々日本人こそ最も多く暴動を企てる仲間であろう。ある道德家はこの時こそ志士、烈女の理想を果す時だと叫ぶであろう。わがことならぬゆえに、ただそれを暴動だといって罵るのである。私はかかる反抗を賢い道だともまた誉むべき態度だとも思ってはいない。しかし彼らをただ罵り、しかもそれを拘束する態度を、矛盾に充ちた醜い愚かな狭い心に過ぎぬと思うのである。…反抗する彼らよりも一層愚かなのは圧迫する我々である。…我々とその隣人との間に永遠の平和を求めようとなれば、我々の心を愛に清め同情に温めるよりほかに道はない。しかし日本は不幸にも刃を加え罵りを与えた。これが果して相互の理解を生み、協力を果し、結合を全くするであろうか。否、朝鮮の全民が骨身に感じる所は限りない怨恨である、反抗である、憎悪である、分離である。独立が彼らの理想となるのは必然な結果であろう。彼らが日本を愛し得ないこそ自然であって、敬い得るこそ例外である。」

これがよく知られた柳の武力弾圧に抗議する文章である。しかしここで注目したいのは、同じ文章の中で彼が次のように述べる箇所である。

「私はある日京城で李朝初期の作であろうと思う古い優秀な刺繍を求めた。明らかに明の作の影響をうけたものであるが、その色彩においても図案においても古朝鮮の美を語るのに十分な作品であった。それを求めた日から

間もなく、私は案内されて朝鮮人の高等女学校を参観した。生徒の製作品をたくさん見たが、ちょうど壁にかけられた大作の刺繍を見た時、私は奇異な感慨に打たれた。それはどこにも朝鮮固有の美を認め得ない現代日本風の作品—すなわち半西洋化された趣味もなく気品もない愚かな図案と浅い色彩との作品であった。しかし先生の説明によれば、それはよく教育された驚くべき手工を示す優等の作品と言われるのである。私は私の所有する古刺繍を思い起して、あやまれた教育の罪を思い、かかる教育を強いられて固有の美を失っていく朝鮮の損失をさびしく思ったのである。

日本の古芸術は朝鮮に恩を受けたのである。法隆寺や奈良の博物館を訪う人はその事実を熟知している。我々が今国宝として海外に誇るものはほとんど支那と朝鮮との恩寵を受けないものはないであろう。しかるに今日の日本は少なくとも報いるのに固有な朝鮮芸術の破壊を以てしたのである。…これがいわゆる同化の道であるなら、それは恐るべき同化である。私は世界芸術に立派な位置を占める朝鮮の名誉を保留するのが、日本の行なうべき正当な人道であると思う。教育は彼らを活かすための教育であって、殺すための教育であってはならぬ。」

柳の批判の眼差しは、ただ単に武力弾圧を非難するだけに向けられてはいない。それは朝鮮の学校で行われていた教育にも向けられている。ここでは柳と現地校の教師との間の意識の大きなずれが鮮明にされている。すなわち、柳にとっては「趣味もなく気品もない愚かな図案と浅い色彩との作品」が「驚くべき手工を示す優等の作品」であり、「あやまれた教育」を嘆く柳に対して「よく教育された」と誇って見せる教師は、あまりに対照的である。

柳の言動を通して、武力弾圧という非道は、非難の対象としてわかりやすく、同時代の日本人にも共感を呼ぶことができたのではないかと思える

が、果して「あやまれた教育」と捉えられる感覚を持った日本人が、当時どれ程いたのであろうか。先に浅川の日記で取り上げた「破壊」を「指導」「改良」と捉える役人同様、実際は「日本化」であっても「近代化」という大義名分を旗印に、罪悪感どころか建前としての「善意」に浸っていたかもしれないからである。

現在でこそ同化政策に懐疑的な論調は多いが、当時としては大多数の日本人にとって「近代化」イコール「文明化」と映ったに違いない。これは高崎宗司が指摘するように、今もなお植民地支配を「良いこととした」と正当化しようとする政治家の「妄言」に垣間見られるものでもある。⁽²⁰⁾

柳は工芸という限られた分野でしか発言していないが、「恐るべき同化」すなわち同化政策による朝鮮固有の文化の「破壊」と捉える彼の眼差しは浅川と同様に先見的で鋭いと言える。

そして続けて翌1920年に発表された「朝鮮の友に贈る書」⁽²¹⁾では、この点についてさらに批判を加えている。

「不幸にも（日本の）人々はあなた方を盟友として信じる事を忘れている。彼らはただ征服者の誇りにあなた方を卑しんでいる。もし彼らに豊かな信仰や感情があるなら、必ずやあなた方に敬念を払う事に躊躇しなかったであろう。…多くの外国の宣教師は自らを卓越した民だと妄想している。しかし同じ醜さが、優秀だと信じる我々の態度にもある事を私は感ぜずにはいられない。敬念や謙讓の徳がない所にどうして友情が保たれよう。真の愛が交わされよう。私は日本に対する朝鮮の反感を、きわめて自然な結果にすぎぬと考えている。

日本が自らかもした擾乱に対しては、日本自らがその責を負わねばならぬ。為政者はあなた方を同化しようとする。しかし不完全な我々にどうしにかかる権威があり得よう。これほど不自然な態度はなく、またこれほど

力を欠く主張はない。同化の主張がこの世に贖い得るものは反抗の結果のみであろう。日本のある者が（西洋人による日本の）キリスト教化を笑い去る様に、あなた方も（朝鮮の）日本化を笑い去るにちがいない。朝鮮固有の美や心の自由は、他のものによって犯されてはならぬ。否、永遠に犯され得るものでないのは自明である。真の一致は同化から来るのではない。個性と個性との相互の尊敬においてのみ結ばれる一があるのみである。」

ここでの柳は、「恐るべき同化」の根底に潜むのは、日本人は欧米人同様「卓越した民」であるという「妄想」であり、そのような「優秀だと信じる我々の態度」は「醜い」とまで明快に言っている。⁽²²⁾ 浅川をして「日本人の恥」と日記に記させたのは、この柳の姿勢の影響が大であったかもしれない。いずれにせよ日本人の驕り高ぶりを正面から批判した文章である。

そして異文化に対し「敬念」を持って臨むことの重要性を説き、「個性と個性との相互の尊敬」なくして真の理解は得られない、とする姿勢もまた浅川の中にも見られたものであり、両者の眼差しは驚くほど一致している。

さらに柳の批判は、次の1922年に出された「失われんとする一朝鮮建築のために」⁽²³⁾を契機に、文化財保護運動という具体的な形となって結実した。

「まさに行われようとしている東洋古建築の無益な破壊に対して、私は今胸を絞られる想いを感じている。朝鮮の首府京城に景福宮を訪ねられた事のない方々には、その王宮の正門であるあの壮大な光化門が取り壊されることについて、恐らく何らの神経をも動かす事がないかもしれぬ。しかし私はすべての読者が東洋を愛し芸術を愛する心の所有者である事を信じたい。たとえ朝鮮という事が直接の注意を読者に促さないとしても、漸次消滅してゆく東洋の古芸術のためにこの一篇を読まれる事を願うのである。これ

は失われてはならぬ一つの芸術の、目前にその破壊を余儀なくされている事に対する私のさびしい感情の披瀝である。

しかしなお、この題目が生き活きと読者に形ある姿を想い浮かぶ事ができないなら、どうか次の様に想像して頂こう。仮に今朝鮮が勃興し日本が衰退し、ついに朝鮮に併合せられ、宮城が廃墟となり、代ってその位置に膨大な洋風な日本総督府の建築が建てられ、あの緑の堀を越えてはるかに仰がれた白壁の江戸城が壊されるその光景を想像して下さい。

否、もう鑿の音を聞く日が迫ってきたと強く想像してみてください。私はあの江戸を記念すべき日本固有の建築の死を悼まずにはおられない。それをもう無用なものだと思って下さるな。実際美においてより優れたものを今日の人には建てる事ができないではないか。(ああ、私は亡びてゆく国の苦痛についてここに新しく語る必要はないであろう。) 必ずや日本のすべての者はこの無謀な処置に憤りを感じるにちがいない。しかし同じ事が現に今京城において、強いられている沈黙の中に起ろうとしているのである。

光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫ろうとしている。お前がかつてこの世にいたという記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしている。」

ここでは光化門の破壊という、批判の対象が明確であるだけに、柳の言葉は説得力をもって読者に訴えかけてくる。冷たく一顧だにされないかもしれない日本人読者に向かって、もし日本が朝鮮の立場であったならと、想像力を働かせて考えてみることによって相手の痛みを慮ろうとする姿勢は、驕りに陥ることを戒めている。一見センチメンタルとも受け取れるが、固有の文化の破壊に対する悲しみと憤りが心を打つ文章である。

このように柳は異文化を破壊することに何らの痛みを伴わない、日本人の驕り高ぶる姿に警鐘を鳴らしていた。その結果、光化門の保存や朝鮮民

族美術館の開館など、局部的には一応の成果を見たと言えるが、1930年代からの朝鮮での同化政策の強化、そして日本国内でのファナティックな国粹主義の台頭を押し止める力とはなり得なかった。

しかしそれでもなお、柳や浅川の視点に立つことに教材化の意義があると感じるのは、大義名分によって覆い隠された感のあるエスノセントリズムを、彼らの眼差しを通して鮮やかに浮かび上がらせることができると考えるからである。そして彼らが同時代の人間でありながら批判的な視点を持ち得たことは、後世の人間が過去を糾弾するのとは比較にならない重みがある。さらに、困難な時代状況の中で彼らが示した異文化に対する敬愛の態度は、エスノセントリズムの克服への道筋を照らしているのではないだろうか。

そこで次章において、エスノセントリズムと向き合い、その克服を模索する授業について具体的に述べたいと思う。

4 授業の展開－「浅川巧・柳宗悦のみた朝鮮」－

ここで述べる授業展開は、私自身が高校で2年間にわたって実践を試みたものに基づいている。⁽²⁴⁾ その経験と反省から次の5時限からなる「浅川巧・柳宗悦のみた朝鮮」と題した授業を構成した。そこで、それぞれの時限ごとに内容を見ていくことにする。

第1時限目：朝鮮の土になった日本人－浅川巧の生涯－

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
ソウルの郊外に建つ浅川巧の墓の写真をもとに、そこに刻まれた文字をハングルで実際に読む。	ハングル文字発音・表記表を示し文字の発音が容易であること、また文法が日本と同じである点など

	を説明し、韓国の文化に対する関心と親しみが持てるよう配慮しながら読む。
<p>墓碑の意味を想像し、「韓国の山と民芸を愛して、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土になる」という文章に込められた、韓国人の人々の思いを理解する。</p>	<p>日本では無名に近い存在である浅川巧が、戦前の人物としては例外的に韓国人の人々から尊敬されていることの重要性が伝わるようにする。</p>
<p>生前の浅川について語る追悼文や談話をもとに、その人となりを知る。</p>	<p>「美談」に終始することがないよう注意し、浅川と日本人との関係に目を向けさせる。</p>
<p>電車内で朝鮮服を来た浅川が、日本人から辱めを受けた際に、なぜ無言で席を立って譲ったのか、彼の思いを想像してみる。</p>	<p>日本人と朝鮮人の狭間で苦悩する浅川の姿を捉えさせる。</p>

第2時限目：浅川巧のみた朝鮮一日記をもとにー

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>浅川が遺した日記を読み、彼の目を通して日本の植民地支配政策の実際を知る。</p>	

<p>浅川の見た王宮内に建設中の朝鮮総督府と南山の朝鮮神宮が、何の目的のために造られているのか、話し合う。</p>	<p>日記を補足するために、当時の地図や写真を提示して、視覚に訴えながら、日記の情景を想像しやすくする。</p>
<p>さらに日記を読み進めながら、当時日本人が抱いていた朝鮮の民族と文化に対する優越感と偏見を知り、それに対する浅川の憤りを理解する。</p>	<p>政策レベルの批判で終わるのではなく、それを支えた日本人一般に見られた「日頃の憎悪」や「不遜」な態度など、日本人の驕りに対して目を向けさせる。</p>
<p>なぜ浅川が指摘する「朝鮮の破壊」が、他の日本人には「改良」や「指導」に思えるのか、その理由について考える。</p>	<p>当時も今も植民地支配を肯定的に捉える日本人の主張には、類似点が見られることに留意する。</p>

第3時限目：「生れながらの名前で呼び掛ける」－浅川巧の思想－

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>朝鮮の歴史の年表をもとに、浅川が生きた時代の朝鮮はどのような状況にあったのか概観する。</p> <p>浅川の著作『朝鮮の膳』、『朝鮮陶磁名考』の抜粋を読み、異文化とどのように向き合うことを彼が</p>	<p>浅川の「生れながらの名前で呼び掛ける」ことにより、朝鮮の工芸品とそれを生み出した民族に対し</p>

<p>主張しているのかを知る。</p> <p>浅川が朝鮮の人々と別け隔てのない交流ができたのはなぜか、その理由について話し合う。</p>	<p>て敬愛の念を抱こうとする態度が、当時多くの日本人に見られた異文化を蔑む態度とは対照的である点に注目する。</p>
--	---

第4時限目：「民芸の父」柳宗悦のみた朝鮮

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>浅川と共に朝鮮文化の保存を唱え後に民芸運動を起こした柳宗悦を取り上げて、年表をもとに人となりを知る。</p> <p>柳が発表した「朝鮮人を想う」、「朝鮮の友に贈る書」、「失われんとする一朝鮮建築のために」の抜粋を読み、彼の目を通して、同化政策とそれを推し進める日本人に対する彼の心情がどのようなものであるのかを知る。</p> <p>なぜ異文化を「破壊」することに「痛み」を感じないのか、その理由について話し合う。</p>	<p>同化とは朝鮮固有の文化の破壊に他ならないにもかかわらず、それを実施する日本人教師が、「よい教育」と言って憚らない点に注意し、柳との意識のずれを明らかにする。</p> <p>柳が「優秀だと信じる我々の態度」を「醜い」と指摘し、浅川同様異文化に対して「敬念」を持って臨むことの重要性を説いている点に注目する。</p>

第5時限目：「内鮮一体」の激化と「わが日本の誇り」

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>浅川の死後、「内鮮一体」のローガンのもと、朝鮮語の禁止、創氏改名など、益々激化していった同化政策について、その実態を知る。</p>	<p>創氏改名については、日本と朝鮮の家族制度の違いと、朝鮮における姓の持つ意味の重要性が十分理解できるよう配慮しながら、問題の重大性が伝わるようにする。</p>
<p>同時期に出版された『日本人はどれだけの事をして来たか』の中の「わが日本の誇り」を読み、日本人の驕りについて知る。</p>	<p>「誇り」の中には、支那・朝鮮を見下す姿勢が含まれていた点に注意し、文化力を誇る「一等国」とは何なのか、批判的に捉えることができるようにする。</p>
<p>最後に柳宗悦の『手仕事の日本』の抜粋を読み、異文化に対する態度について話し合う。</p>	<p>国粹的な時代状況の中で、柳が異文化に対して見下す事を戒め相互に尊び合うことの重要性を指摘している点に注目する。</p>

第5時限目について、資料の補足をしておく。『日本人はどれだけの事をして来たか』は1936年（昭和11年）に発行された日本少国民文庫の第三巻である。⁽²⁵⁾ 授業で用いたのは次の「わが日本の誇り」という章である。

「わが日本の誇り

一、万世一系の天皇

私たち日本人は、大きな誇りを持っています。わが日本帝国が世界の第

一流に属する立派な国だという誇りを持っています。日本はなぜそんなに立派な国なのでしょう。

単に古くから国が開け、今もなお続いているというだけなら、わが国は到底隣の支那にかないません。支那は五、六千年も続いていますが、幾度となく革命を繰り返した国です。夏がほろんで殷になり、周になり、秦になり、漢になったかと思えば魏になり晋になり、隋の次には唐が起こり、宋から元になり、明になり、明から清になったというように、開びやく以来、二十四回も朝廷が変わったのです。フランス、ドイツ、ロシア、イスパニアなども、わが日本より新しい国でありながら、やはり帝王の血統が幾度となく変わっています。

それにひきかえ、わが国は、建国以来今日まで三千年の間、天照大神の御子孫であらせられる天皇がお治めになって、神武天皇から今上天皇まで百二十四代にわたって、連綿として皇統が続いています。この万世一系の天皇をいただいていることが、私たち日本人にとって大きな誇りです。

二、世界に類のない独立国家

もう一つ、私たちが世界に誇ってよいことは、わが日本はまだ一度も外国のあなどりを受けたことがないということです。外国人からその国土を攻め取られたことが一度もないということです。

わが日本に近いところでは、インドがイギリスに、インド支那がフランスに、ジャワがオランダに、フィリピンがイスパニア（後にはアメリカ合衆国）におさえつけられてしまいました。隣の支那は、イギリス、フランス、ロシア、アメリカなどに、上海、香港、広東、ウラジオストックなど、よい所を占領されたばかりでなく、今日でも四方八方からねらわれております。まことに気の毒なことですが、また意気地のないことでもあります。

次に朝鮮はどうでしょう。今はわが日本の領土となっていますが、二千

年ほど前には漢の武帝に北朝鮮を奪われて、今の平壤付近から京城付近へかけて四百年近くも続き、その間、支那人のしたい放題になっていました。その後、朝鮮人は支那人の支配からまぬかれましたが、同じ種族でありながら、高句麗、百濟、新羅の三国にわかれて、互いに睨み合い、攻めたり攻められたり、領地を奪ったり奪い返されたりしていました。やがて新羅が唐の力を借りて朝鮮全体を統一することになりましたが、いわば唐の保護国のようなもので、独立国というのは名ばかりでした。今から約七百年前には、わが国へも攻め寄せてきたことのある元の属国になりました。次の明代にもやはり自立の力がなく、今から五十年前の日清戦役まではほとんど清国の属国にも等しかったのです。日本は朝鮮の自立を助けるために清国と戦いましたが、戦いに敗けて清国が朝鮮から手を引くと、今度はロシアが入り替わって満州の方から侵入して来ました。放っておくわけには行かないので、再び日本は武器を取って立ちロシアを撃退しました。これが日露戦役で、それ以来、朝鮮の人々は、わが日本の支配のもとに暮らしているのです。

これらの諸国に比べると、小さいながらわが日本はなかなか腕力の強い国です。ただの一度だって外国人に踏みにじられたことがないのだから、立派なものです。

三、世界文化の同化

なお一つ、わが日本がすぐれた文明国の一つであるということも、私たちの誇りです。

わが国の文化が開けはじめたのは決して早いとはいえません。遠くはエジプト、バビロニア、ギリシャ、ローマなどの西方諸国、近くはインド、支那、朝鮮などの東方諸国よりはずっと遅れていますが、今の西洋列強諸国よりは、はるかに古いのです。初めは朝鮮や支那やインドから文化を受け

入れて、改良や工夫を加え、それを日本の国体や日本人の気風によく調和した、日本的な文化につくり上げました。最近には、御承知の通り、西洋文化のよいところを絶えず取り入れておりますが、これも決して鵜呑みにしているのではなく、十分に研究して、わが国に適するように改め、もし出来ることなら世界で一番立派なものにしようと努力しているのです。

こういう風に、外国の文化の長所を取って、日本固有文化の短所を補いましたから、わが国の文化は進む一方で、ただ一筋に向上発展の路をたどって来ました。そのために今では数ある世界の国々の中でも、わが日本は五大強国の一つとなり、また文化の最もすぐれた一等国のうちに数えられているのです。そして、これからは今までのように諸外国から学ぶばかりではなく、多少なりとも世界の国々に向かって何か貢献しなければならない立場に置かれているのです。」

それから、最後に用いた柳宗悦の『手仕事の日本』の抜粋は、1943年（昭和18年）に書かれたこの本の後記の文章である。⁽²⁶⁾ 朝鮮固有の美から、やがて日本固有の美の探求へと向かった柳もまた、国粹的な時代状況と無縁とは言い難い。しかし熊倉功夫は、戦時中の柳はファナティックなナショナリズムの論調とは一線を画していたと指摘している。⁽²⁷⁾ そこで授業で用いる部分を引用してみる。

「吾々はもっと日本を見直さねばなりません。それも具体的な形のあるものを通して、日本の姿を見守らねばなりません。そうしてこのことはやがて吾々に正しい自信を呼び醒まさせてくれるであります。ただ一つここで注意したいのは、吾々が固有のものを尊ぶということは、他の国のものを誇るとか侮るとかいう意味が伴ってはなりません。もし桜が梅を誇ったら愚かだと誰からもいわれるでしょう。国々はお互いに固有のものを尊び合わねばなりません。それに興味深いことには、真に国民的な郷土的な性

質を持つものは、お互に形こそ違え、その内側には一つに触れ合うものがあるのを感じます。この意味で真に民族的なものは、お互いに近い兄弟だともいえるでありましょう。世界は一つに結ばれているものだということを、かえって固有のものから学びます。」

おわりに

エスノセントリズムというと、民族紛争や宗教対立をすぐに思い浮べてしまうが、果してそれは日本と無縁のものであろうか。我々にとってのエスノセントリズムとは、他国と比較して一番でありたいという、幼児的願望に似たものなのかもしれない。

しかし、私にはそれを他愛のないものとして見過ごす気にはなれない。私自身が大学院生であったバブル期に、調査で滞在していたタイで目のあたりにした日本人ビジネスマンや観光客の多くは、まさに驕り高ぶる姿に相違なかった。あのジャパン・アズ・ナンバーワンの世界一の「経済大国」の自信が崩壊してしまった現在、それに代わるものを追い求めて文化力を誇ろうとする動きが出てきたのかもしれないが、それはどこか戦前の論調と波長が合ってきているように思える。

不況のために、バブル期の驕りすら十分に検証が行われようとはしていないが、考えてみれば戦前の驕りもまた、敗戦によって不問にされてしまった感があり、日本人自身の手で払拭したとは到底言い難い。

文化は経済とは異なり、優劣などつけられるものではない。それは柳の言葉を借りるまでもなく明白なはずなのに、かつての「わが日本の誇り」ではないが、「文化大国」「文明国」「一等国」などという言葉に、我々はいともたやすく踊ってしまうのではないだろうか。とすれば踊りやすい私たちを踊らせようとする動きには警戒すべきである。

これからの若い世代にとって、他と比較してしか自信が持てないような「誇り」など必要ない。それは「誇り」どころか卑しむべき態度である、と浅川や柳なら語るのではないか。反対に異文化をおとしめず敬意を払って接することができる態度こそ、人間としての「誇り」につながるものであると信ずる。

註

- (1) 授業の内容については、拙稿「現代史の取り扱いについて—大衆社会の視点から—」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第33・34集』（1996年）及び同「現代史の取り扱いについて（2）—現代社会の視点から—」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第35集』（1997年）を参照のこと。
- (2) 小熊英二著『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社 1995年）
- (3) 小熊英二著『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社 1998年）
- (4) マーク・ピーティー著『20世紀の日本4 植民地—帝国50年の興亡』（読売新聞社 1996年）など、近年になって日本の植民地主義の全体像を描こうとする試みが始まっている。
- (5) 高崎宗司著『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』（草風館 1997年）や芸術新潮編集部編「特集 李朝の美を教えた兄弟 浅川伯教と巧」『芸術新潮 1997年5月号』などを通して、浅川に対する関心の高まりが見られる。
- (6) 高根沢等が「植民地期朝鮮の学習における日韓友好の視点の導入—浅川巧にみる異文化理解を中心に—」（平成10年度筑波大学大学院教育研究科修士論文 1998年）の中で、この問題点を指摘している。
- (7) 呉善花著『生活者の日本統治時代 なぜ「よき関係」のあったことを語らないのか』（三交社 2000年）

- (8) 安倍能成著「人間の価値」、岩波編集部編『国語巻6』（岩波書店1934年）
- (9) 前掲の『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』157～158頁より引用。
- (10) 前掲の『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』162頁より引用。
- (11) 君島和彦著「歴史教科書をめぐる日本と韓国の対話」『東京学芸大学 紀要 社会科学 vol.45』（1994年）
- (12) 目良誠二郎著「福沢諭吉の視点から柳宗悦の視点へ—日朝関係史のバクロ型授業を乗り越える試み—」『歴史地理教育 465号』（歴史教育者協議会編1990年）
- (13) 高崎宗司著『〈増補新版〉「妄言」の原型 日本人の朝鮮観』（木犀社1996年）
- (14) 柳宗悦著「朝鮮の友に贈る書」、日本民芸協会編『朝鮮とその芸術 柳宗悦選集第四巻』（春秋社1978年）30頁より引用。
- (15) 浅川巧著『浅川巧全集』（草風館1996年）
- (16) 原文では「剛情（ママ）」となっているが、漢字の間違いと考えて「強情」とした。
- (17) 原文では「不鮮（ママ）」となっているが、漢字の間違いと考えて「不遜」とした。
- (18) 前掲の『浅川巧全集』に収められている。
- (19) 日本民芸協会編『朝鮮とその芸術 柳宗悦選集第四巻』（春秋社1978年）から引用。
- (20) 前掲の『〈増補新版〉「妄言」の原型 日本人の朝鮮観』の中で詳しく挙げられている。
- (21) 前掲の『朝鮮とその芸術 柳宗悦選集第四巻』から引用。
- (22) 小熊英二は前掲の『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』の第15章で、柳のこうした発言をもとに、柳の思想

に反映されているオリエンタリズムの影響に言及している。柳が反近代の姿勢を貫く力となったのもまた、西洋的な見地であった可能性が高い。

- (23) 前掲の『朝鮮とその芸術 柳宗悦選集第四巻』から引用。
- (24) 拙稿「高等学校における異文化理解学習(2)ー日本統治時代の朝鮮を事例としてー」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第37集』(1999年)及び、韓国の高校で浅川を取り上げた授業を行った実践記録、筑波大学大学院社会科学教育コース編『海外研修報告書ー第三回韓国研修ー』(筑波大学教育学系 谷川彰英 1998年)を参照した。
- (25) 西村真次著『日本少国民文庫 第三巻 日本人はどれだけの事をして来たか』(新潮社 1936年)から引用。
- (26) 柳宗悦著『手仕事の日本』(岩波文庫 1985年)から引用。
- (27) 前掲の『手仕事の日本』の解説の中で熊倉功は、柳の朝鮮以降の活動を「日本学」の試みとしながらも、「狭量な国学」にならなかった点に触れている。